

年間第 4 主日の説教

金トマス・アキノナス 神父 2010 年 1 月 31 日 (日)

(金 大烈・ザベリオ神父様の同時通訳にて)

《“いけにえ”生きていて捧げるもの》

おはようございます。

聖霊と共に生きている人と聖霊と共に生きていない人の中には、大きな違いがあります。聖霊と共に生きている人は、いつも正しい霊的な礼拝が出来ます。旧約・新約の聖書で書かれている正しい霊的な礼拝の為には三つの条件があります。

1 番目は必ず生きている“いけにえ”を捧げなくてはいけない。そして 2 番目はその“いけにえ”に傷が付いていてはいけない。3 番目は捧げる人が直接“いけにえ”を祭壇へ持って行かなくてはいけないと書かれています。この三つ条件は一つ一つのテーマが大きいので、今日はそのうちの 1 つを選んで話したいと思います。

最初に話した 1 番目の条件はなんでしたか？ 捧げる物が必ず生きている“いけにえ”でないといけないと話しました。旧約の祭司長達は死んだ捧げものは山羊でも拒否しました。必ず生きている捧げものだけ受け取りました。

それでは神学的に生きている捧げもの“いけにえ”とはどのように解釈すればいいのでしょうか？ ミサに与っていながら、沢山の人が死んでいるミサに与る場合があります。それはミサの一時間の間に身体は椅子に座っていても、心がどこかに行っています。頭の中は別の所で遊んでいます。それは死んだミサと言ってもよいと思います。死んだようなミサに 10 回、100 回与っても神様は喜ばれないと思います。医学用語に昏睡状態とか脳死状態という言葉があります。沢山の信者がミサにそのような状態で与っていると思います。司祭の口から話される説教は耳に入らず、聖堂に入って来た時から出る事を考えます。脳死状態の信仰の生活と言ってもよいと思います。そのようなミサを神様は受け入れません。聖堂の入り口から皆様の後ろ姿を見ると一生懸命祭壇の十字架を見ているような感じがします。しかしその頭の中はいろいろな思いで満ちています。町を巡り、ミサ後に行くスーパーやゴルフ場、そしてミサ後に何を食べようか等と思い浮べて与っていたら、そのミサは死んだミサになってしまうと思います。祈る時も同じです。死んだ祈りを捧げる人もいます。ロザリオの祈りをする時も、聖書を読む時も同じです。イエス様がおっしゃった通りに、いつも目覚めて霊的に信仰の生活をしなくてはならないと強く伝えます。

死んだ司祭もいます。生きている司祭もいます。私は自分自身にいつも質問します「金神父、あなたは生きている司祭なのか？ それとも脳死状態の司祭なのか？」悪魔は死んでいる司祭の方向に導こうとします。信者も同じです。表だけ信者の人が結構います。飾りのような感じでカトリックを選んだ信者の人もいます。

生きている司祭に会う恵みがありました。今働いている聖母の聖地で、巡礼団のミサを捧げているときにある人が入ってきました。ローマンカラーを着ていたので司祭だとすぐにわかりましたが、彼は顔色が病的に悪く、腹水がたまってお腹は張り山の様で、体も弱っている様子でした。抗がん剤治

療の為、髪のもも抜け帽子をかぶっていました。ミサ中でしたので、一緒にミサを捧げようと祭壇から声をかけまして、祭壇に登り一緒にミサを捧げましたが、ミサが終わるまで座ったままの状態でもミサに与かる位でした。初めて会う司祭でしたので、ミサ後、香部屋で話をしました。どこから来たのですか等と質問したら、その司祭は自分の事について話しました。「私は医者です。医者になった後、神学校に入りローマで叙階され、すぐ宣教師としてアフリカのスーダンに渡りました。8年間、医師そして司祭として働きました。」

スーダンは内戦の激しい国です。沢山の人が災害と貧困によって飢え死んだり、エイズにかかって死んだりして、地獄のような雰囲気だったそうです、その中でその若い司祭は苦労しながら人々の為に全てを捧げました。

スーダンにはエイズに罹るといろいろな援助が出るそうです。彼が書いた本を読みますと、「ある日、娘を連れて母親が来て自分の娘がエイズに罹っていると言いました。しかし検査すると悪性の皮膚病でした。それを母親に告げるとエイズではない事に喜ぶのではなく、激しく悲しみに泣きました。娘がエイズだったら援助がもらえろと思ったのに、エイズでなかった為に、それがもらえないという現実には悲しんだんです。」と書かれています。そんな悲惨な生活をしている場所がスーダンです。その司祭は毎日 300 人の患者さんを 8 年間見続けたそうです。8 年ぶりに休暇を取り、韓国に帰って自分の体の検査をしたら末期がんであると診断されたそうです。

生きる希望がありませんでした。本やCDやテープを通して知った聖母の聖地に行き、マリア様のみ旨をはかりたいと思い、巡礼に訪れたそうです。聖母の聖地に行けば、いろいろな病が癒されるという噂も聞いていたそうです。しかし全ての人が癒される訳ではありません。按手する時に感じます。この人はまだ生かされる、この人はマリア様が死の準備をさせる為に、ここに呼びかけられた、と感じる事があります。そしてこの司祭が按手を願い、私が頭に手を置いたときに感じた事は、マリア様が死の準備をさせる為に、ここに呼びかけられたとわかりました。しかしその司祭に「あなたはすぐ死にます」と言えませんでした。ただ目で話しました。「神父様あなたは生きられません、マリア様が死の準備の為、最後までイエス様のように生き方する様に、イエス様の御心に近づく様に、マリア様がここまで呼びかけられたのです、心の準備をして下さい。」と目で話しました。その司祭はそれをわかったように、自分の目を見ながら涙を流していました。司祭を連れて一緒に来た司祭のお姉さんは、私に大きな声で「私の弟司祭はまだ生かされるのでしょうか、生かされるのでしょうか」と叫びました。そこで私は「もし力があれば、もう一度連れて来てください」とだけ伝え、祝福し彼らは帰って行きました。

今日から 15 日前の事でした。韓国のあるカトリックの総合病院から、その司祭が危篤になって自分に会いたがっていると連絡がありました。私は忙しく、そして大雪が降って車でソウルまで行くのは危険だったため、行くことは出来ませんでした。雪がとけたらすぐに行こうと思っていたら、翌日の新聞に亡くなったという記事が出ていました。仕事を終えた後、夜の 10 時過ぎに遺体の安置されている所に車を運転して向かいました。その司祭は祭服を着て帽子を被り、横たわっていました。石の様に冷たい頭の上に手を置いて祈りました。「神父様、生きているうちに会いに来る事が出来なくてごめんなさい。明日の葬儀ミサにも与れない為、今日挨拶に来ました。あなたは 8 年間という短い司祭の生でしたが偉大な生き方を見せてくれました。スーダンの人達が『お父さん！お父さん！』と呼びな

がら慕う訳がわかります。順番だと 30 年司祭をしている私が先に去るべきですが、あなたが先に呼びかけられたのですね。今あなたはイエス様と聖母マリア様の迎えを待っているのでしょうか。」

8 年間の司祭職でしたが、その司祭は生きている司祭でした。皆様の目では満足出来ない、それでもどかしい気持ちになる司祭もいると思います。ローマンカラーが生きている司祭を示す事ではありません。神父とよばれても生きている司祭と言えません。

一日に何度も「自分は生きている司祭か？」と自ら聞いてみます。皆様も自分に対して質問してみてください。「自分がイエス様に生きている捧げものとして生き方をしているのか？」と。

今日のこのミサも生きている捧げものとして捧げましょう。悪の勢力は必ずミサの間に、もっと強く心を奪おうとしています。御聖体が私達の身体に入られる時、私達の霊的な物は天を迎えます。洗礼を受けて、たった一日しか経ってなくても、正しい信者の生き方を見せる事が出来る人もいます。逆に 50 年信者として生きていても死んだままの信仰の人もいます。

今年は司祭年です。特に皆様、この世の中の司祭が生きている司祭になれるように、皆様の祈りがなによりも必要です。これは司祭が信者の方々が生きている信者として生きる様に、毎日祈る事と同じです。皆様がミサに来る時は、皆様が自分の足を運んで来たわけではありません。皆様は招かれて来たのです。自分の足を運んで来たという考えと、招かれて来たという考えは全く違います。自分の足を運んで来たと思う人は、形式にとられる危険があるのです。しかし、私のような罪びとをイエス様が呼びかけられて、御聖体を下さるという気持ちでミサに与れば、私達は自然に生きている“いけにえ”になる事が出来ます。生きている捧げものは、ミサが終わって外に出かけても、聖霊で満たされた命を保たなければなりません。死んだ体は腐った臭いがします。生きている私達はキリストの香りがしなければなりません。一番近い身内の人にキリストの香りを伝える事が出来なければ私達は死んだ信仰者かもしれせん。

皆様、司祭と一つの心になって、このミサを生きている“いけにえ”として捧げましょう。

アーメン、ありがとうございました！